訳者あとがき

訳者あとがき(P297~)

スーパーマインドとはまた壮大な用語を造ったものである。マインド（心）といえば、何千年も使いなれている語だから誰にも分る。だが突きつめて考えてみるとやはり分らない。難問を凝縮したような客体であり主体であ

ふと玄関へいってみると、日めくりカレンダーがかかっている。「賞めよ讃えよ、神性が発揮される」と大きく書かれている。これだと私は膝を叩いた。スーパーマインドとは神性なのだ。ハワードはヴェーダンタ哲学の文

同じ木に二羽の鳥がとまっている。一羽はいちばん高い枝に、他は下枝にいる。上の鳥はあたりの様子を静かに平和に眺めながら停まっている。その黄金の羽根のとおりに、彼は荘厳華麗な姿で憩っている。

下の鳥は神経質に枝から枝へとび移り、木の実の味みをしている。甘い実に出会うと興奮してにぎやかに尊るが、酸っぱい実にぶつかるとがっかりして沈みこんでしまう。この鳥はときどき見あげ、上の鳥の堂々たる態度に

下の鳥は前後左右へ、上から下、下から上へと数分ごとに飛び移り、甘い実から酸っぱい実へ変わるたびに、上機嫌から失望へ、笑顔から泣き顔となる。甘い実だけを求めているうちに、彼は甘さの後では必ず普さがくると

しかしついに、彼は日一杯にひどく渋い実を食べて、もうとれ以上我慢できなくなるときが来る。危機が来たのだ。彼はいままでとはまったく違ったなにかを選ぶか、でなければ正気を失うしかない。で彼はおずおずと上へ

意腐なアプローチをつづけるうちに、ある時点で育費が起こる。下の鳥は、彼自身がるとからその上の鳥なのだと悟るのだ！彼にはただ分らなかっただけなのだ。幻想に曇らされて、彼は別々の二羽の鳥があると思っていた

その死にものぐるいの枝務りが催眠的幻想の中のものだといまにして分った、そして彼自身があの王者のような鳥だと知った彼は、いま興奮と悲歎を抜けだしている。彼はもはや彼自身の外には幸福を探さない。彼の真の自

われわれの人生の目的はスーパーマインドを通して宇宙とーとなることなのだ。ハワードも、読者のあなたも、訳者のわたしも、みなスーパーマインドをもっている。スーパーマインドは一即多的実体なのだ。これらの交流

最後に、出版事情により、三章を割愛してこのページ数にするしかなかった。原著者および読者のご諒承を得たい。先に掲げた、ハワードのヴェーダンタ哲学の引用は、この割愛ページから拾った珠玉である。

（一九八〇・十一・十一 川口正吉記）

Revision #2
Created 8 November 2024 03:04:01 by ゆう
Updated 8 November 2024 03:07:10 by ゆう